

事」までをつけ加えるとすると、七つどころでは、とても整理しきれない。銀河の進化は、さらに、宇宙論との関連においてとらえられねばならない。現在優勢である大爆発説をすてて、定常宇宙論にとってかわられたとすれば、銀河の進化のイメージも、よほど変わるであろう。また、銀河の進化をうながす要因に、従来の力学的なエネルギーと恒星内部での熱核反応だけではなく、銀河中心核に第三のエネルギーを想定する必要があるのかも知れない。とにかく、现阶段では、観測によって知られている事象を、帰納的につなぎあわせて、一つの進化物語を作ることは、まだ出来ない状態である。そして、それぞれの天文学者が、ある宇宙論的なスペキュレーションを持っていて、それが、観測事象の進化論的な解釈を下す仕方に影響をあたえているようである。

付 記

本文に関係のある事柄を、より詳しく紹介した記事がすでに天文月報に載せられてあるので、参照していただきたい。

- ① 宮本昌典「星雲の渦状構造」62巻2号(1969)
- ② 石田憲一「銀河の進化論」62巻11号(1969)
- ③ 佐藤文隆「宇宙におけるヘリウム形成」63巻4号(1970)
- ④ 奥田治之、舞原俊憲「銀河系の中心部」64巻7号(1971)

雑 報

新彗星 Bradfield (1974b)

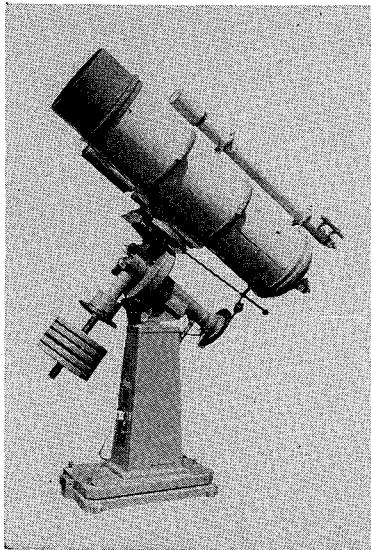
オーストラリア・阿德レード近郊のアマチュア天文家、ブラッドフィールドは1974年2月12日(U.T.)に、ちょうこくしつ座に9等の新彗星を発見した。

発見当時は南天に低く、日本など北半球の諸国では観測は不可能であったが、パース天文台のCandy氏により初期軌道が計算され、予報が発表された。それによると、近日点通過後の3月下旬から4月上旬にかけて肉眼光度に達することが期待された。事実3月下旬になると、東京天文台に新彗星発見? という電報が次々に舞い込み、この彗星が、我が国のアマチュア彗星探索家の観測網にひっかかって来たことを示している。入電した内で最も大きく観測しているのは光度4等、尾の長さ4度と見積った人もいる。また外国の観測では9度におよぶガスの尾と3度に達するダストの尾を3月22日の写真で認めている人もある。

コハウテク彗星に次いで出現した彗星で、かなりの人の関心を集めた彗星であった。Candy氏による軌道要素を記しておく。

$$\left. \begin{aligned} T &= 1974 \text{年} 3 \text{月} 18.3554 \text{ E.T.} & \omega &= 333^\circ 1262 \\ & & \Omega &= 143.0370 \\ q &= 0.503191 \text{ AU} & i &= 61.2891 \end{aligned} \right\} 1950.0$$

(香西洋樹)



天体望遠鏡
ドーム、製作

西村製の天体望遠鏡

40 cm 反射望遠鏡の納入先

- | | |
|--------|---------------------|
| No. 1 | 富山市立天文台 |
| No. 2 | 仙台市立天文台 |
| No. 3 | 東 京 大 学 |
| No. 4 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 5 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 6 | 台北天文台 (TAIWAN) |
| No. 7 | 北イリノイズ大学 (USA) |
| No. 8 | サン・チェゴ大学 (USA) |
| No. 9 | 聖アンドリウス大学 (ENGLAND) |
| No. 10 | 新潟大学高田分校 |
| No. 11 | ソウル大学 (KOREA) |
| No. 12 | 愛知教育大学(刈谷) |

606 京都市左京区吉田二本松町 27

株式会社 西村製作所

TEL. (075) 771-1570
691-9580